

安芸高田市学校規模適正化委員会（第2回）議事録

平成21年7月8日（水）19:00～21:00

安芸高田市教育委員会4階小ホール

事務局

- 第2回安芸高田市学校規模適正化委員会を開催したい。委員の2名は欠席の連絡をいただいている。

委員長

- 本日の会議は9時終了を予定している。事務局より資料の説明いただきたい。

事務局

- 前回も現況について説明したが、抽象的な報告であったため、本日は踏み込んだ内容としている。

コンサルタント

【資料説明】

委員

- 先ほどグラフの説明があったが、教員一人あたりの児童数のようなデータがあるだろうか。各学校それぞれについて、教員一人がどれくらいの児童をみているかわかるだろうか。平均することにどれくらいの意味があるかわからないが、データがあるなら出してもらえないだろうか。

事務局

- 次回委員会で対応させていただきたい。

委員

- この委員会は、子どもの数が減ってこのままでは複式学級が増えていく。そうになると大変だという問題意識で始まっていると解釈しているが、資料説明を聞いていると、複式学級のデメリットがあまり感じられない。むしろ良い面があると聞かせていただいた。もちろん教員の負担が大きいということはわかるが、子どもたちにとってはよいことだと感じたが、みなさんの意見はどうだろうか。

委員

- 複式学級に関しての意見ではないが発言させていただきたい。この委員会の目的は、安芸高田市において、小・中学校は1学年何人が適正かを話し合うことだと思うが、ただ、通学区域ひとつを見ても、「これが適正な規模だ」というものは何を何回重ねても出ないと思う。それよりも今後、統合するという事になれば、子どもにも保護者にも負担がかかってくると思う。そういうことも踏まえて、今の規模のままで、適正な教育内容というものを検討していく方がよいと思う。例えば、学校では体験農業や野外活動などを行うが、それらを何校かが合同で行う。また、ある教科は複数校が合同で取り組むといったこともできるのではないかと。行事についても、演劇の発表、合唱コンクールもどこの学校でもされていると思う。それらも、安芸高田市文化祭といったような形でできるのではないかと。基本的には今の規模のままで、教育内容は一緒に取り組む方向もあるのではないかと。そういったことは、逆に大きい規模ではできないことと思う。難しいことと思うが、安芸高田市独特の

教育形態をこの委員会で検討していけたらと思う。

委員

- 子どもの人数が減っているから、複式学級のことを考えるのではなく、前回も高宮の方が言われたような若者定住の取組など、安芸高田市に人を呼べることを将来的に考えていくほうがよいと思う。

委員

- 委員会に参加するものは勉強になるが、委員会の資料を見て、保護者や地域の人はどう感じるかと考えると、危機感を持っている。前回資料の12ページをみると、平成30年には、複式学級が増えるとなっている。こういう資料が出ていくと、田舎へ帰ってくる親は教育のことが不安になるだろう。非常に残念に思う。
- 7月2日に、学校の役員の意見を聞く機会を設けたが、その後保護者から手紙をいただいた。その手紙は、若者定住住宅に住む保護者からであるが、「移住前に、野球や運動会ができないことを校長先生に相談した際、校長先生は『大きな学校ですることにはできないが、少人数でしかできないことがある。あなたの選択は間違っていないと思います』と言われ、その力強い言葉に背中をおされ移住を決意した」とあった。子どもたちは、野球に優る体験ができたと思う。さらに、川根小から、高等学校に進んだ時には、川根小であったことを英語のスピーチとして発表しているという。そのような点は小規模校のメリットである。しかし、平成30年のデータが出ていくことは、地域に帰りたいと考えている親にはマイナス要素になると思う。教育と地域が一緒になって、こういうデータのようにならないようなまちづくりをしていかなければならない。

委員長

- この委員会は、適正な学校規模ということについての諮問となっている。教育効果を高めるための適正な学校規模について議論、意見もお願いしたい。安芸高田市がどういう市を目指していくのか。そのための教育はどう考えるのか。私は交通整理をさせていただきたい。どういう教育が安芸高田市にふさわしいか、旧町の良さを活かすことが、安芸高田市らしきを作っていくことにつながることもある。例えば、吉田の小学校が川根に行って勉強することもあるだろう。「安芸高田の教育をどう考えるか」、「教育効果は安芸高田市ならでは、どういうことができるのか」、「その場合の適正な規模はどうか」というように、議論を展開していただければと思う。中学校は各町1校であるが、選択制としても移動はしにくいと思う。小学校についても美土里は既に1校である。しかし、「自分の地域は関係ない」と思わずに、安芸高田市のこととして考えていただきたいと思う。

委員

- 言葉の意味がよくわからない。教育効果とは具体的にどういう意味だろうか。

委員長

- 子どもたちにどういう力をつけたいか。安芸高田市の状況で考えていくということだろう。「確かな学力調査ではこういう点数であってほしい」というのも一つだろう。「スポーツに秀でた子を育てる」こともあろう。安芸高田市では、サッカー、ハンドボール、柔道などで全国に通用する活動もある。そういうものをどう考えるの

かで教育効果を高めるということもあるだろう。

委員

- 今の説明だと、要するに勉強、スポーツができる子を育てるために効果的な方法を考えるということだろうか。

委員長

- それらにとらわれないでほしい。その内容を考えるのが、みなさんが検討することである。例えばということで話をさせていただいた。義務教育の目標は、9年間の中で示されている。それは、日本全体の目標である。それらを踏まえ、安芸高田市ではどう考えるのかということである。

委員

- いろいろ悩んでいる。高宮町では、合併前は中学校1校、小学校3校が望ましいとしてきた。合併して5年しか経っていない。規模適正化委員会ではメリット、デメリットを検討する中で適正化になってくると思う。しかし、一方で給食サービス、保育園の民営化など、合理主義、効率で物事を考えている。小規模校の教育では、給食サービスも地域でサービスが可能である。そういうことを行って教育効果を高めていく方法もあるはずである。しかし、規模適正化となると、教育効果の話ではなく、平成30年の児童数データなどが出てくるため、自分の頭が切り変わらない。

委員長

- 教育は、今ある教育を前提として考えていくべきである。将来展望にたった教育内容を検討することも諮問の中にある。教育効果を高める点と将来展望に立つというはざまで揺れるところである。今回の資料としては、将来展望を見据えたものがどんどん出てきている。

委員

- 教育効果を考えて議論を行い、ここで出た議論はどれくらいの意味があるのだろうか。元は適正規模を考える委員会である。例えば、今の規模のまま、このような内容はどうかという提案をどこまで聞いていただけるのかわからないが、私の考えを述べさせていただきたいと思う。
- 7年前まで4年間、向原中学校、高宮中学校の非常勤講師を勤めてきた。中学生をみて、なんと素直な子どもたちだろうと感じた。深く関わっていくと難しいところもそれぞれあるが、いいところだと感じた。結婚後、高宮に住んでいるが、ここで子育てをしていきたいと思った。ただし、中学校に勤めていて感じたことは、中学生で50人前後であり、小さくまとまっているということである。特に、向原中学校は小・中と同じ規模で、同じ子どもたちが通う。そうすると自然と女の子はグループができる。リーダー格の子は、調子よく行く。中学に入ると生徒会の中心的存在となり活躍し、その姿は輝かしいし、生き生きしているが、そこから、大きい規模の高校に入ると、うまくいかないことが多かったのも事実である。結局、ずっと同じ環境であることの安心感がある。自分がどういう発言をしても、みんながついてきてくれる、自分がリーダー的に振る舞ってもみんながついてきてくれるという安心感の中、のびのびやっていたが、高校になって初めて大きなところで、なんとなく自分が通用しないという空気を味わう。それで、つぶれていくというわけで

はないが、小さくなっていってしまう子どもたちもたくさん見た。そういう状況を知っているのに、今後規模が小さくなっていく時、通学区域が遠いから、地元の小学校はなくしてはいけないからという理由で「統合絶対反対」というのもどうなのかという思いもある。だからといって、今の近い小学校がくつついても、大きな規模にはならない。むしろ、今は小学校複数校から、中学校1校となるところが、小学校1校から中学校1校になってしまっただけで、統合することにはあまり意味がないように思う。効果は最初の何年かだけだろう。

- 2校の中学校に勤めていて思ったのは、文化祭や演劇発表などが同じようにあったが、同じ学年でも、こっちの学校はすばらしい事ややってが、もう一方ではもう少し頑張れるのに、と感じる場面もあった。しかし、お互いを知らないで、自分のやっていることに満足する。教師もそうである。同じ学年でも、一方はこんなに頑張っているのだから、もう一方ももっと力を入れられたのではないかと感じる事が、色々な場面であった。例えば作品でもそうである。美術担当だったので、他校生徒の作品を見せることもした。小規模校だから、切磋琢磨が少ないというならば、交流を時々すればよいと思う。切磋琢磨の機会が増えると思う。もちろん授業の間の移動や、各学校の教育計画への影響も考慮しなければならないと思う。急に「今日は〇〇小学校と一緒にです」となると現場は大混乱だと思うが、それは先生にとっても良い刺激になると思う。そこはどうかして、それくらい大胆に変えていく必要があると思う。部活にしても、週のうち3日は合同練習にするなどの方法もあるのではないかと。そういうふうには、よそではできないくらい大きな改革をしなければ、田舎の小さな学校の良さは残せないと思う。

委員長

- 諮問を受けた内容については、その通りになるわけではない。つまり、意見を提出してまとめていく中で、それに基づいて、市の教育行政が進められていくということである。ここでまとめた意見を提出しても、絶対的なものではない。かえって理想的な安芸高田のめざす教育をインパクトのあるものを届けることが大事と思う。安芸高田でどういう教育を考えるか、それにふさわしいのはどういう規模の我学校か。学校を一つにすることもあるし、各学校が集まって力を発揮するという意見もあるだろう。妄想だと思って聞いていただきたいが、例えば、4年生までは分校的な学校に通い、5、6年から中1までは一つの学校に通い、中学校2、3年生は大きな学校へ通うというように、現在の小学校6年間、中学校3年間という枠にとらわれないで考えていくこともできる。これらは一つの例である。それくらいの気持ちで安芸高田の教育を考えていってはどうか。

委員

- 委員長の考えを聞かせていただいたが、諮問の通りになるのでないなら、せっかくここで議論をしてもあまり意味がないというふうに聞こえてしまう。いろいろな意見を教育委員会がただ聞き置くだけでは、この場はいったい何なのだろうと思う。この場は学校の規模だけに終始するということではなく、教育をどう考えるか、どうあるべきかという意見が交わされるはずである。したがって、せっかくそこで出た意見は教育委員会で尊重していただきたい。形の上では諮問かもしれないが、せつ

かくそういう意見が出たならしっかり聞いていただきたい。前向きに考えていただければと思う。

委員長

- 諮問されたものを参考とすると言われている。参考にあたって採用してもらうような意見をまとめなければ、意味がないのではということである。それも、みなさんの手で作らなければ意味がない。
- 現状の教育で、最大限努力するのは教師である。複式学級の話の中で教師の力量が必要であるとあったが、それを支えていく行政も大事である。しかし、教育をよくするのは教師の努力だけでよいのか、子どもたちが味わえない良さもあるのではないか、それをどのように考えるかが問われていると思う。
- 複式学級についてさらにいえば、先ほどの説明でメリットはなるほどと思って聞き、デメリットはこうすれば解消できると思いながら聞いていた。だから、辻駒委員が言われることもよくわかる。でも、子どもたちにとってみれば、その条件の中だけでよいのか考えなければいけない。与えられた条件でよいものを目指すということは当然あるが、もっといい条件をはじめから作ることはできないのかも問われている。

委員

- 高宮の川根地域にいるが、何年か先には学校がなくなると分かっているが、決してあきらめる気持ちになってはいけないと思う。たとえ一人になっても存続しなければいけないと思う。先ほど事務局に説明いただいた14ページの資料では、指導能力の高い教職員の育成が必要であるとあった。小さい学校に来ていただく先生は大変と思う。大変な中でも、先生はいつも子どもをつれて遊んでいた。子どもたちは本当に生き生きしていた。今はその子たちが、都会に出て、田舎に帰って子育てをしているという状況である。小規模校の教育内容というものは、先生方は、学校、地域を巻き込んだ教育をしておられる。近年はその状況が見えにくい。地域の中で子どもが育っていく年数は小学校、中学校までである。おそらく15歳までである。われわれは中学生までは地元の良さを身に付けさせ、また、子ども達もそういう気持ちで、自分のふるさとを感じてほしいが、今はそういうこともできない。
- 都会に出ても田舎に育った経験を子ども達に教えていくべきであるが、学校では神楽などもできない。2月に清流祭りをやっている。地域ごとに劇団を作って発表をしている。学校ではできないので、地域で行っている。以前の学校教育にはゆとりがあったが、今はゆとりがない。子どもたちに関わる時間がないと聞く。子どもがかわいそうである。そういう学校であれば、川根小学校を残すといっても親の意見を聞かないといけないだろう。地域がさびれるというより、教育力をたかめなければならぬだろう。せっかく学校があっても、しっかりした教育内容がないといけない。
- また、第1回の時にも発言したが、まず地域にきていただいて、学校を見ていただき、保護者の意見を聞いてもらいたい。私の地域では、一番遠いところでは小学校まで6km以上ある。一年生から自転車通学である。自転車に乗っていける道路網の整備ができているかというところではない。1車線の道路で通っている。幸いに

して今までは事故なく自転車通学を続けている。そういう学校である。地域のみなさんの声、保護者の声を聞いていただきたい。

委員

- 先般、朝の時間の読書モデル校として、甲立小学校が大臣表彰を受けた。校長先生は大変喜んでいました。私は子どもたちが表彰を受けたということ自体、子どもたちが誇りを持てる体験になったと思う。各学校が特色を持ったことを行いながら競っていければよいのではないかと思う。読書でも、文学でもよいし、スポーツでも、神楽でもよい。特色あるものをうえつけていったらよいと思う。
- 甲立小学校ももともとは3小学校が合併してできた経緯がある。先ほどからの意見を聞いていて感じるのは、時代の流れというものである。6町が合併するときいろいろな意見があったが、一緒になった。これからのことについても、時代の流れも考慮しながら、進んでいかなければならないと思う。

委員

- 男女比の資料をみていたが、甲立小学校2年生では、男子10人、女子が1人である。今は2年生なのでよいが、5、6年になると、この女の子は可愛そうだと率直に思う。しかし、これを合併で統合するとなると、この子たちが大人になったとき、学校がないところに帰ってきて子どもを育てようかという気になるだろうかと思う。単純に数字を整理して適正化というのではなく、個々に応じた教育内容に応じて、規模が適正になるか、不適正なのかを考えないといけない。子どもの気持ちで言えば、友達が多い方がよいと思う。先ほどの女の子もクラスに1人より、何人かいた方がよいと思う。安芸高田市の教育として一つ方針を導いていかなければならないので、もっと、個々に落として、建設的な意見を考えていけたらよいと思う。

委員

- 郷野の地域振興会の会長をしている。郷野小は複式になりそうな小規模校である。郷野小学校は、昭和10年に木造校舎を村をあげて建て、村長が村の予算2年分をつぎ込んだ木造の校舎である。現在でもがっしりしており100年、120年ももつ学校だと考えている。地域としても学校教育に熱心であり、伝統的に学校と地域が協力的である。郷野小学校に来られた先生が、「このように地域と溶け込んだ学校は初めて」と誉めていただくこともある。運動会も昭和30年代から小学校と地区運動会を連合運動会として行っている。また、昭和20年代に教育に熱心な方が金管バンドのために寄附をされて、金管バンドの活動が活発である。しかし、近年は75人になったので、編成が難しいという状況である。郷野小には、地域のよいところがあると思う。例えば、夏休みにはヤマメのつかみ取りなど、地域と子どもが一体となって、地域と連携した教育ができていると思う。
- また、中学校の先生から聞くと、吉田中学校にあがった郷野小出身の生徒は、学力的にもまあまあだし、体力的にはずば抜けていると聞く。教育の面はよくわからないが、小規模校では地域と連携した学校づくりをやっていけば、特色のある学校ができるのではないだろうか。そのためには教職員、PTAだけでは覚束ないかもしれない。地域がどれだけ係わるかの力量にかかると私は考えている。このまま存続させていただいて、なんとか努力していきたいと考えている。

委員長

- 地域代表という形の発言も歓迎する。発言されていない方も意見をいただければと思う。

委員

- なぜ今、この会議が招集されているのか。なぜ地域から、小・中学校からそれぞれ人を集められたのか、明確に原点に帰って考えてみたい。この会の目標が見えない。この会に共通する「論点の抽出」、「分類」、足りないものは「調査する」、といった行程を経て解析されれば、この会でなければならない会議のあり方があるのではないかと思う。地域では、教育現場と地元で重ねられてきた活動がそれぞれの地域の特色ある学校づくりになっていると思うが、数の議論だけで、統廃合、複式ということになるのであれば、今行っている少子化対策などはどうなるのだろうか。
- もしかしたら、統合を望む声が多い地域もあるかもしれない。一方で統合を望まない地域もあるだろう。そういうことも必要であれば調査すべきではないか。また、校舎の安全性についても、補強工事か建て替えの判断や、もし統合を望んでいる声が多い地域があるならば、補強するのはいかがなものかという議論も出てくるだろう。机の上だけで、20 数名の意見だけで結論は出ないと思う。目標、論点の整理、分類調査ができるのか、できないのかという議論をしてはいかがだろうか。

委員長

- 本格的にどう進めていくのかということである。今までは、思いを語っていただくことも必要だろうといくことで、自由に発言をさせていただいている。前回は、耐震化のデータ等も見ていただき、将来予測も示した。諮問の主旨は「少子化社会の中で教育効果を高め、将来展望にたった教育行政を進めていくための、適正な学校規模及び配置について」である。「教育効果」という点については、特色を持った教育を進めている、これからも進めていかなければならないということが出てきたところである。「将来展望に立った」という点については、子どもたちが減少し、平成30年には13校中8校が複式学級になると予測されているということである。少子化対策も進められているが、それが劇的に回復することがあるかどうかは分からない。そういった施策の資料も必要なかもしれない。
- 子どもたちによりよい教育環境を提供する条件を進めていく行政はどのような方向に進んでいけばよいのか、その方向にどのような学校規模がよいのかを検討し、その中では、統合といった話も出てくるのかもしれない。考えなければならぬのは、安芸高田市の教育をみなさんがどう考えるかである。そのためにふさわしい規模はどうすればできるか、小規模でもできる場合もある。踏まえておかなければならぬのは、時代の流れという意見も出された、また学校の安全性の問題もあり、耐震化を進めるには今はチャンスであるという条件もある。教育を最優先させて、規模によってどんなことができるかを考えながら、議論を進めていければよいと思う。

委員

- 前回の資料で一番気になったのは、国・県と比較して不登校児童が高率で推移している点である。小規模校のデメリットが出ているのかと感じた。中1ギャップという言葉が出ること自体、問題である。ギャップはあつて当たり前だが、適切な時

機に小さいギャップを経験していないことで中1ギャップが出てしまうのではないかと思う。複式であろうと、そうでなかろうと、学習面は先生方の助力によってある程度は充たされると思う。しかし、今の子どもたちをみていると、勉強はできるが、人と関われない、人の痛みがわからない。心の問題を抱えている子どもが多いと思う。親としては、人の痛みがわかる子どもになってほしいと思う。社会で自立するために、将来、何を武器にして生きていくか、どういう仕事をしたいか、何をしたいのかを見つけていってほしいと思う。生きるたくましさ子どもに身につけてほしいと思う。それには、色々な人と関わって、色々な刺激を感じてほしいと思う。社会に出ても、会社に入っても、人との関わりで仕事も何でもできていくものである。結論としては、心豊かに育つために、たくさんの人と係わってほしい。その手段として合併もあり得るし、そこまでいかななくても、学校同士で多く交流するというのも手段としてあってよいと思う。

委員

- 今の意見に対してであるが、「小規模であるが故に中1ギャップが起きやすい」というようなことは絶対ないと思う。また、「色々な人と関わるべき」という意見は本当にそうだと思う。ただ、それは、同じ年代の子と関わることだけが大切ではなく、色々な年代の人と関わっていく方が大事だと思う。統合すると、学校へ登校するのに、バス通学になってしまう。そうすると子どもは地域を歩かない。子どもを見なくなり、子どもが消えてしまうような状態になる。交流する子どもは増えるかもしれないが、年代を超えた関わりは減ってしまう。「人の痛みが分からない」というような問題は、人間の創造力の欠如だと思う。創造するには、体験が伴わないといけない。創造するには、たくさんの人間の姿を毎日見ながら、生きていかなければならないと思う。自分も年老いていくということはその姿を見なければ、創造することはできないと思う。そういう意味でも、たくさん年代の人と常に関わっていかないといけない。同年代が増えた中での中1ギャップもあるかもしれないが、立ち直って高校へ行った子どもも見ている。小規模だから起きやすいということもないと思う。小規模の中だけで育ったら社会に出てついていけないということもないと思う。むしろ色々な年代と関わった子どもが生きる力が強くなるのではと思う。学校教育の目標として、「地域に開かれた学校、夢と志を持った活力ある子ども」をあげている。言葉だけでなく、実のある教育になっていくには、むしろ小規模でいくべきではないかと思っている。

委員長

- 時間がせまっているので今日はここまでの意見で整理をしていきたい。教育の効果が表れる規模、学級の規模については、いろいろ検討されているが、確たるものはない。ただ、事例やその教育効果等の資料を、今後提供していく必要がある。また、規模を考えるにあたり、何を優先させるのかを考えなければならない。こういった点を検討しながら、今後の議論を進めていくという事でいかがだろうか。協議はこれで打ち切らせていただきたい。最後に、次回開催について、視察の案内があるので、事務局からお願いしたい。

事務局

- 意見交換の中でも「現地をみて、意見を聞いてもらいたい」という発言もあり、実際に現場をみていただくことも大切なことと考えている。委員のみなさまに学校を見ていただけるように、学校視察を計画している。詳しくは、手元に資料を用意しているのでごらんいただきたい。「学校現場視察」として、7月13日(月)もしくは15日(水)に高宮中学校1学年、川根小学校3・4学年を見ていただきたいと考えている。9時40分に高宮の中学校に集合いただき、授業参観後、川根小学校に移動し、授業参観、意見交換としたい。高宮中学校現地集合、移動は公用車、高宮中学校解散としてご案内させていただいている。夏休みに入る関係で、急な日程となり大変恐縮であるが、ぜひご参加をいただければと思う。

委員

- 来週のことである。前回もお願いしたが、時間にゆとりがない。案内から実施までに2週間から10日のゆとりがほしい。

事務局

- この件については、児童数が少なくなっていくということの共通認識を持っていただくということで急遽計画させていただいた。2日間の中でなるべくご参加いただきたい。そこは理解をいただきたい。

委員

- 共通の理解を持つには、大多数が参加できるという前提でなければならない。急に日を決めて、出られる人だけ出てくださいでは共通の理解は持てないだろう。秋になってもよいと思う。みなさんが参加できる時を選んでほしい。そうしないと議論ができない。

事務局

- 会議の最初にもお願いしたが、委員の任期は2年としているが、基本的にはこの1年間で一定の方向を出していただきたい。とりわけ11月くらいには中間報告をいただきたいとお願いしているところである。行政の都合と思われるかもしれないが、校舎の耐震や大規模改修の問題は時機を逸するとなかなか解決が難しい問題である。国は耐震化に最優先の予算付けをしている。今回の緊急経済対策でもそういった処置がなされている。そういったことも含めて、ある程度の方向性をいただく中で行政は具体的に動いていきたいという思いがある。そういった意味で11月に一定の方向性をいただきたいとお願いしている。そのスケジュールでは、9月視察は、議論の回数が少なくなってしまう。確かに、急な話ではあるが、この時期に設定させていただいた。ご理解いただきたい。

委員長

- 何人が参加できるか分からないが、こういう場を設定してくださっているので、時間が許す方は参加いただいて、会議の場で、話をしていただければと思う。

委員

- 私が代表である高宮地区の高宮中学校と川根小学校が視察対象だが、教育委員会が後から出した日程が来週であり、調整をしてほしいと言われても難しい。教育委員会は耐震化の予算やスケジュールを非常に気にしているが、われわれの議論していることと、教育委員会の考えていることが違いすぎる。自分たちにとっては地元

のことであり、10年先の状況を考えれば、時代の流れの中ではあきらめなければならないこともあるかもしれないが、もう少しスケジュール調整にゆとりを持ってほしい。地元の人も、委員になっているのに、なぜ同行していないのかと思う人もいるだろう。残念である。

委員

- 日を変えなくてよいので、遅くてもよいので、秋に再度実施できるように検討していただきたい。

委員

- この時期に何をしなければならないというような、全体のスケジュールを一度検討してほしい。今のように急に視察が入るとなると、時間を割いて行っても、心づもりもない、何を知りたいのかもわからない。整理のつかないまま視察に行ってもあまり意味がないのではないか。11月には中間報告が必要と言われても、自分たちには会議の全体の流れが見えていない。急に視察が入っても、時間も費用も無駄という気がしてならない。

委員長

- 中間の方向を出すまでの流れについての流れ、委員会全体の流れを示してほしい。ただ、共通理解をもつこともなかなか難しいので、参加できる方は視察に行ってもらえればと思う。

委員

- 次回のスケジュール調整については、曜日を決めて行ったらよいのではないかと？委員長のスケジュールを示してもらってもよい。11月までの日程を示してもらえるとよいのだが。
- 時間が迫っているが意見を言わせていただきたい。耐震強度の問題について、優先してしなければならないというなら、すべてを明らかにすればよいと思う。統合について、教育委員会の腹づもりがあるなら先に示してほしい。

事務局

- 見学会については、9月にも追加の形で開催したい。また、要望のあった11月の中間報告を求めていることの理由も示したい。予算編成の関係や、早く学校をよくしたいという強い思いもある。そういったことを含めたテーマで次回会議を行いたい。
- 次回委員会は8月5日(水)19時からということをお願いしたい。

委員

- 視察については、人数が多くなってもよいのか。

事務局

- 構わない。

委員長

- 次回会議も問題がなければ公開としたい。以上をもち、第2回委員会を終了したい。ありがとうございました。